

生徒指導への対応

－中学校の取組を中心に－

田坂 宜文

はじめに

昭和58年をピークに中学校では、校内暴力、不登校、いじめなどが全国的に広がり生徒指導が社会問題化してきた時代だった。

教師はなぜ生徒が暴れるのか中学生の行動が理解できないばかりか身の危険すら感じ、若い教師やベテランの教師の中には退職する人も出る状況であった。教師は暗中模索の中で今までの生徒指導では通用しない生徒達への対応を考え、苦悩する日々が続いた。この当時に見られた生徒たちの変化とは、

- 今までは、言って聞かぬ生徒、今は言っても聞かない生徒
- 今まで通用した学校のルールが崩壊し、自分勝手に身勝手な行動が横行
- 生徒の問題行動が集団化し、教師の指導の域を超え今までの指導では対応できなくなった。

このような状況の中で今までの生徒指導を根本から考え直し再構築をはからなければならなかった。

この新たな出発が今日の生徒指導体制を構築するスタートになった。生徒指導が困難な中で学校が取り組んだ過程を振り返り、今日の生徒指導のあり方を考えてみたい。

社会の変化と生徒指導の変遷

1 生徒指導とは

中学時代を振り返って生徒指導とは何かの問いに対して、

- 私は真面目だったので生徒指導と縁がなかった。(学生)
- 悪さしていた友達は担任や生徒指導の先生に指導を受けていた。(学生)
- 幸にして先生たちの手を煩わせることがなかったのですが生徒指導は受けていないと思います。(保護者)等の声が帰ってくる。

このような受け止め方は、生徒指導がもつ意味を一面的にしかとらえておらず、生徒指導がもつ意味を理解していなかったことになる。また、保護者や教師にとっても生徒指導は一部の人の特別なことという意識は、生徒指導のあるべき姿を理解していないことの表れでもある。

2 生徒指導の本質

本来の生徒指導の目的は「すべての生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校のすべての活動が、生徒一人ひとりにとって自己実現を援助し、自己存在感を与えるようになることを目指すところにある。

(S 40年文部省)

つまり、

- 特定の教師が、特定の生徒に対して行うものではない。
- 全ての教師が全ての生徒に対して行うものである。
- 問題行動への対応といった、いわば消極的な面にだけあるのでなく、生徒一人ひとりの自己実現を援助する（よりよい成長への援助）である。

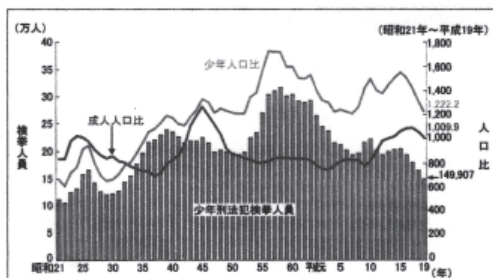
生徒指導を問題行動への対応という一面だけで捉える傾向が強いが、これは車に例えると片側の車輪だけを指しているのであって、車が真っ直ぐに走るためには、もう一方の車輪もなければならない。

生徒指導は、問題行動への対応と生徒一人ひとりの自己実現を援助するという両面を持つことで初めて生徒指導といえるのである。

そこで、このような考えが形成されるに至ったこれまでの経過を振り返り生徒指導について考えてみたい。

生徒指導上のさまざまな問題は時代と共に年々複雑になり、今まであった問題が解決することなく、今まであった問題に新たな問題が加わり、肥大化して一層困難な状況が生まれてきている。

表1 少年刑法犯の検挙人員及び人口比（10歳以上20歳未満の少年人口10万人当たりの検挙人員の比率）の推移



(図) 1 警察庁の統計及び総務省統計局の人口資料による。
2 検挙少年の検挙人員を含む。
3 昭和45年以降は、昭和少年の自衛隊連合連合死傷者を除く。
4 「少年人口比」は、10歳以上20歳未満の少年人口10万人当たりの少年刑法犯検挙人員の比率であり、「成人人口比」は、20歳以上の成人人口10万人当たりの成人刑法犯検挙人員の比率である。
(出典) 法務省法務総合研究所「犯罪白書」(平成20年版)

(警察庁統計一少年刑法犯の検挙人員及び人口比)

3 社会の変化と子ども達

警察庁の統計一少年刑法犯の検挙人員及び人口比から戦後の少年の問題行動と社会の状況を見てみたい。

この表1から戦後3つのピーク(昭和26年, 39年, 58年, 平成年間)は定まっていなかったことが分かる。この時代背景を分析してみる。

昭和26年(1951年)第一のピーク

社会の出来事

○前年の1950年に朝鮮戦争勃発53年7月休戦

○サンフランシスコ講和条約調印→日本の独立

○力道山がデビュー

社会の状況

○戦後の経済的貧困を背景とした問題

・生きるため、食べるための犯罪(窃盗)

昭和30年代前半までは成人の犯罪の割合が多いが、それ以降は少年の割合が上回っている。この頃は戦後の混乱期で大人も子どもも貧困生活からの犯罪が多かった。

○軍需景気(特需)高度経済成長の足がかり物価

○葉書5円、封書10円、たばこ30円

昭和39年(1964年)第二のピーク

社会の出来事

○東京オリンピック開催

○日韓条約成立

○東海道新幹線開通(東京～新大阪4時間)

社会の状況

○高度経済成長

○物質的には豊か、反面「心の置き忘れ」(心の問題が取り上げられるようになる)

○戦後世代の旧世代(大人)への反抗

(学園紛争、新宿駅を中心都市としたフーテン族、ヒッピーの出現)

- 薬物の乱用→40年代へ
物価
- 箱形ティッシュ発売80円
- その他の特徴
- カギっ子 ○TVで11PM放映

昭和58年（1983年）第三のピーク

社会の出来事

- 横浜市中学生が労務者連続暴行殺傷事件発生（S58.2月）
3人死亡，10人に重軽傷，10人逮捕
- 町田市忠生中学校事件（S58.2月）
- 戸塚ヨットスクール事件
- 社会の状況（問題行動の質的变化の背景）
- 経済が発展し，物質的に豊かになり中流意識広がる（国民の90%が中流意識）
- 高校進学率90%以上，大学30%以上
- 知育偏重，受験戦争（競争），つめこみ教育，少子化，核家族化が進む
- 子ども達の集団遊びが減少（群れの中で育つことを忘れた子ども達）
- 荒れる中学生
 - ・校内暴力，不登校，いじめ，シンナー等の薬物乱用
- TVで金八先生の放映が高視聴率

時代とともに問題行動が質的に変化し，生徒指導の課題が大きな社会問題となった。国も解決のため児童・生徒の健全育成という生徒指導の積極的な面を強調し，学校が取り組むべき新たな方向を示した。

- 望ましい人間関係の促進
- 自然・生活体験の不足を補う
- 不安の解消や自己指導能力の伸長

このような取り組みが行われる中でも問題行動は止まることがなかった。第三のピーク前後における社会的な事件を見てみる。

4 昭和58年前後の社会的な事件

昭和55年 中学生による川崎金属バット両親殺人事件

昭和60年1月 大阪産大高校1年男子生徒，いじめの仕返しと2人の同級生に惨殺される

昭和61年2月 東京都富士見中学校鹿川君葬式ごっこが社会問題化（いじめに教師も荷担）

平成に入っても社会的な事件は後を絶たない。平成年間の社会的事件を見てみると

平成1年 宮崎 勤 連続幼女誘拐殺人事件

平成5年5月1日 山形マツト巻き殺人事件

平成6年1月1日 愛知県中学生いじめ事件（大河内清輝君事件）

平成13年 大阪池田小学校児童殺傷事件

平成16年 佐世保小6女児同級生に切られ死亡

平成17年 京都宇治学習塾小6女児刺殺事件

平成18年 奈良県で医師宅放火死亡事件で高1長男逮捕

平成22年 川崎いじめ自殺（止められなかった修学旅行の翌日）

- ・東京都練馬区で暴行受け中3自殺（6月13日）

- ・神奈川県清心女子高生が隣の席の生徒を刺す（うるさかったから）

- ・自動車のフォイルを足に着けられ海に落とされる。

- ・女子中学生2人が互いの家に火をつけ，親を殺害

- ・祖母が高1の孫を刺し，自分も自殺を図る

今日においても生徒指導上の問題は絶えず，繰り返り起こっている。特に「不登校」「いじめ」「校内暴力」は深刻な課題で解決に向けての努力を重ねているが，解決への道は厳しい状況にある。

直近の生徒指導上の諸問題から児童・生徒の

問題を見てみる。

生徒指導上の諸問題 (平成20年度)

1 不登校

全国の小学校

22,652人 (昨年度より1,275人減少)

都道府県別に多いのは神奈川県, 東京, 愛知の順

全国の中学校

104,153人 (1,175人減少)

都道府県別に多いのは神奈川県, 東京, 大阪の順

2 いじめ

全国では,

小学校40,807件 (前年度より8,089件減少)

都道府県別に多いのは, 愛知県, 熊本, 岐阜, 千葉の順

中学校36,795件 (前年度より6,710件減少)

都道府県別に多いのは, 愛知県, 千葉, 神奈川, 静岡の順

3 校内暴力

校内暴力の内訳は, 対教師暴力, 生徒間暴力, 対人暴力, 器物損壊に分けられる。

小学校での調査は平成9年度より始まった。

全国の国公私立の発生件数は,

小学校5,996件 (前年度より1,189件増加)

中学校39,161件 (前年度より5,636件増加)

都道府県別に多いのは, 神奈川県, 大阪, 千葉の順

校内暴力の内訳 (20年度) を神奈川県を例に小・中・高校の合計で見ると

1位生徒間暴力 (4,337件), 2位器物損壊 (3,554件), 3位対教師暴力, (1,152件) 4位対人暴力 (189件) の順である。

生徒指導上の問題は前年度との比較では減少することがあっても, 長いスパンで見ると増加の一途をたどっているのが現実である。

ここまで生徒指導という言葉で話を進めてきたが, 一方生活指導という言葉も今まで使われてきた。生活指導と生徒指導の意味するものの違いについて触れてみたい。

社会の変化と生徒指導

1 生徒指導の考え方の変遷

生徒指導という概念は, 戦後の新しい指導の考え方・方法として導入された。当初「生活指導」という言葉が使われたが, 今日では「生徒指導」が一般的に使われている。

*生活指導 (guidance)

価値観に関わりの深い言葉のため, 生徒指導より多義に使われる。

学校以外で多く使われ, 例として相撲協会の力士に対する生活指導などがある。

*生徒指導 (pupil guidance)

積極的な教育活動上の「機能」で学校教育全体を通して行われる。(生徒理解, 教育相談等)

昭和26年に学習指導要領一般編に学校教育の重要な任務として取り上げられた。

昭和39年, 少年非行が増加, しかも集団化したため中央少年問題協議会が中学校に於ける生徒指導体制の充実強化を求めた。

この年, 初めて中学校と高校の教頭対象に生徒指導の充実強化を図るため生徒指導講座が実施された。

昭和40年文部科学省が生徒指導の理解と普及を図る。非行対策は本来生徒指導の消極的な面であって, すべての生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すことが通知された。

昭和60年臨教審の第一次答申

生徒指導は問題行動への対応といった, いわば消極的な面にだけあるのでなく, 積極的にす

すべての生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校のすべての活動が、生徒一人ひとりにとって自己実現を援助し、自己存在感を与えるようになることを目指すところにあると答申した。

平成8年 中教審「21世紀を展望したわが国の教育の在り方」で「いじめ」・「不登校」が最も大きな課題で学校のみで解決することに固執しない開かれた学校運営が大切と報告した。

平成13年スクールカウンセラーが配置され、平成20年にはソーシャルワーカーが配置されるなど相談体制の充実がはかられた。

この間、学校も荒れに荒れた中学校を立て直そうと試行錯誤を重ね様々な努力をしながら生徒指導体制や取り組みを行ってきた。

ここに見るように現在では、学校における「機能」としての生徒指導が一般化している。

生徒指導として取り組んだ厳しい時代を振り返ってみたい。

2 昭和58年頃の中学校の様子

昭和60年に示された生徒指導の本質は理解しているものの、それより目の前で起こっている問題への対応が第一だった。解決が進む中で徐々に生徒指導の本質に迫る取り組みが行われた。この時代は、生徒指導上のありとあらゆる問題がいっぺんに露呈した。

(1) 学校での生徒の様子

○授業不成立：立ち歩き、私語、周りの生徒にいたずら、教室から勝手に出て行く、教師の注意をまったく聞かない

○朝会・集会の不成立：集合時間に集まらない、整列しない、私語、話を聞かない

○学校間の抗争：市内・近隣の市・町の中学との勢力争い

○薬物の乱用：シンナー、喫煙、飲酒

○窃盗：万引き、オートバイ盗（直結）

○暴走族：各地に暴走族ができ、中学生も加わる。また江ノ島やR139号線沿いでギャラリーに加わる

○家出：些細なことで家を飛び出してしまう

○乱れた生活習慣：どこでもつばを吐く、弁当の食べ残しをまき散らす

殺人以外の問題が各学校で起こっていたと言っても過言でない。

これまでの生徒指導では対応できなくなった大きな要因は

○生徒個人の問題行動から集団化した問題行動へ変化

○取り巻き生徒集団（付和雷同層）の拡大

問題を起こした生徒を周りの生徒がかばったり、隠すなどして誰が問題を起こしたのか分からないようにし、教師が指導できないいうやむやな状況があった。

(2) 当時の学校の状態に対する教師の対応

① 目の前で次々起こる事件への対応で疲れ切っていた。

② 生徒が何故暴れるのか分からない。→生徒理解の不足

③ 暴れている生徒への対応策が分からない。力で抑えられない。

④ 校内の複数箇所で問題が起こり、教師が混乱してしまう。

⑤ 担任、学年の指導の範囲を超えて行き詰まってしまう。

⑥ 教師たちは、生徒指導担当教諭や恐いと言われる一部の先生に頼ってしまう。

⑦ 他人に頼り教師が一致団結して取り組む姿勢が足りない。→教師集団としてのチーム力がない

⑧ 校内が騒々しいが何が起こっているのか分からない。→情報の共有ができていない

⑨ 教職員間の不信
担任や学年が何を考え、どうしようとし

ているのか分からない。→**学級や学年間の共通理解不足**

⑩ 学年・担任批判

学年や担任がしっかり指導していないから問題が起こると他学年や他学級の教師が批判する。→**学年・担任批判**

⑪ 生徒指導体制の不備

何かをしなければ、どうにかしなければという気持ちだけが先行して、どうしたらいいのか、何をしたらいいのかが分からない。→**具体的な方策が見つからない**

⑫ 学校として生徒指導体制をどのように作っていくのか分からない→**生徒指導体制の不備**

このような状況にあった時A中学校で教師に行った昭和59年度と60年度のアンケートを見ると60年度のアンケートでは取り組んだ結果として改善の様子が見られるようになってきた。

A中学校のアンケートからその時教師が感じていた声をアンケートから振り返ってみる。

昭和59年度反省（生徒指導全体会）

この時代は、生徒数の増大に伴い学校がマンモス化した時代でもある。

- ・職員室を一つにしたので全体が見えやすくなったが、起きている事件や心配事の学年を越えての情報伝達が遅れるため、後手に回った指導、行き当たりばつたりの事件対処が行われていて指導がうまくいかない状態が相変わらず続いている。
- ・効果的な指導のため日々の速やかな情報伝達が必要だと思う。
- ・朝会の整列の仕方、話の聞き方がひどく悪く、程度の差はあっても各学年に当てはまる。毎回毎回あのだらしなさを繰り返しては朝会の意味もないと思う。

- ・問題を起こす生徒の人数が圧倒的に増えているようだ。現象面を一つひとつ追いかけているのではこちらが疲れきってしまうだけだ。抜本的な方針の打ち出しを望む。
- ・職員に対しての暴力、挑発は当該学年の生徒への指導がもっとあってもよいのではないか？挑発されても教師は我慢して堪え忍ばなければ行けないのか？怒りのぶつけ所がない。
- ・初期の段階でもう少し指導できなかったか。当該学年として最大の努力を重ねるべきだ。
- ・指導が徹底されずに同じことの繰り返しが見られた。
- ・情報がほとんど流れて来ず、今一体どうなっているのか分からないまま過ぎていった。次から次に起こる事件に追い回されているのは十分わかるが、朝の打ち合わせなどでもっと職員の共通理解ができるようにして欲しい。
- ・「いじめ」「校舎破壊・落書き」「喫煙」「シンナー」などに対して生徒の自主的な取り組みが見られなかった。

60年度反省（生徒指導全体会）

- ・職員会議等で全体の報告があるが、大変良いことだと思う。
- ・全員協力して指導に当たっていると思う。しかし、問題山積、動きも激しいのでもう少し教員にゆとりがないと疲れがたまっている。
- ・他学年の指導も見えてきているが、より緊密な連絡が必要。
- ・指導は共通理解がある程度できたと思うが、父親的な厳しさに欠け子どもになめられている面が多々あった。
- ・生徒の心をつかみきれず苦労した。何となく生徒に迎合しているようで嫌でたまらなかった。

- ・甘かった。生徒のルール違反に対して見過ごしが多かったと思う。
- ・教師間の指導面での共通理解、同じ歩調で生徒に当たる点で消極的だった。良い悪いのメリハリをきちんと行動で示せる指導をする必要がある。
- ・生徒が悪いことをやっても徹底的に指導できない。(見て見ぬふりか)
- ・指導の方向はあっても実際に教員側で行動が取れなかったのではないかな？
- ・本当に生徒の中に入り生徒理解に努めたかどうか？生徒の押しに教員が負けていたのではないだろうか？
- ・話して分からせる指導の難しさを感じました。自分の気付いた範囲で指導をしてきたつもりですが、ままだ、見過ごしも多かった。今後もっと気をつけたいと思います。
- ・問題点が多いが、教師が「生徒に解からせよう」とする姿勢を持ち続けられたことは評価すべき点である。
- ・説得と人間関係を作っていくという「心の指導」は、いろいろと非難はあったが正論だと思う。今後この方向は崩して欲しくない。

アンダーラインは筆者

生徒指導体制を再構築する発想の原点

A中学校では日々生徒の問題行動への対応に追われながら対応策を模索する中から、新たに積極的な生徒指導への取組が行われ、徐々にではあるが成果が見られるようになってきた。

1 A中学校での取組の柱と内容

(1) 児童・生徒理解に努める

「解り、解らせ、解り合う」を合い言葉に指導の徹底が行われた。

「解り、解らせ、解り合う」とは、教師が生徒理解に努めるとともに教師の考えや思いを生徒にも理解させ、生徒と教師がお互いに理解し

合うことである。

- ① 生徒理解の学習会を開催
各学年から事例を出し、全職員で対応を考える事例研究会やロールプレイによる研修会を開催する。
- ② 生徒と教師の人間関係を再構築する各教師が様々な場面で生徒への声掛けを心がける。
- ③ 情報交換
日常の子どもの様子をお互いに知らせあい、情報の交換を行う。

(2) 学習支援

- ① わかる授業の工夫、改善と展開
わかりやすい授業をするための授業の工夫と改善を行うとともに勉強が苦手な生徒個々に対して残り勉強やテスト前学習を実施する。

(3) 教職員間の協力体制（チーム力）を構築

- ① 全職員で生徒指導に取り組む。
問題行動に対して複数で対応する職員の危険回避も考え、教師の団結力を見せ、教師みんなが関わっていることを生徒に示し、ここで起きている問題は学校の問題という姿勢を示す。
- ② 教職員の友好的関係を構築する。
スポーツ、親睦会、リクレーション、職員旅行等を行い、お互いが協力しあう意識を高める。
- ③ 生徒指導担当教諭や腕力の強い怖い先生ばかりに頼るのでなく、全員でチームによる指導をする。(教師がそれぞれ自分の力量に応じたことをする)

(4) 情報を共有する

- ① 学級・学年間の風通しをよくし、全職員で生徒指導に当たり、学級や学年王国的な考えを捨て、この学校の生徒として指導にあたる。

- ② 今こんな事が起こっていて、こう取り組んでいる等報告し、他学年の理解と協力、情報の提供を依頼し、情報を共有する。
- ③ 緊急時の対応の仕方や連絡体制を作り、全職員で対応できるようにする。
- ④ 職員会議に必ずその月に起こったことを生徒指導担当教諭から報告し、情報を共有する。

(5) 校内の生徒指導体制を再構築する

- ① 指導体制を見直し再構築する。
学期別の反省、年度末の反省から全員で生徒指導体制を見直し、絵に描いた餅にならないように確認しながら手直し修正を加える。
- ② 各学年に学年生担を置き、情報を集約し他学年との連絡調整を行う。
- ③ 押さえ込む指導から生徒理解に基づく指導体制をつくる。
- ④ 学校内で起きた問題を全て教師が解決しようとする教員の意識を改革し、外部機関との連携をはかる。
- ⑤ 開かれた生徒指導の展開
家庭や関係機関とのネットワーク化をはかり、「学校の説明責任」を果たし開かれた生徒指導をめざす。このことにより信頼される学校作りを行う。

このような取り組みを続ける中から徐々にではあるが成果が表れ、生徒も落ち着いた学校生活を送るようになってきた。生徒指導上の問題が全くない学校はないが、学校が騒然となる問題は見られなくなった。しかし、教師には異動があり、生徒も毎年入学し卒業して入れ替わる。教師は、いつの時代でも生徒指導に対する強い意識を持ち学校全体でチームとして取り組む姿勢を持ち続けることが大切である。

おわりに

阪神・淡路大震災があった年の3月、東京で全国の道徳教育の発表大会があり神戸の小学校の校長から次のような報告がされた。

○家が崩れ、火が出たため避難しようと子どもの手を引いて逃げている時、子どもは親の手を払い戻ろうとしたり、教科書が焼けてしまうと叫んだ事例が数多く報告された。この小学校は子どもの気持ちを汲んで教科書無しで学校を再開した。

○避難所で入浴やトイレの順番を待っている時、大人は横入りするなど勝手な行動をとる人が多かった。しかし、子どもは順番を守りじっと待っていた。何日も続く内に大人が子ども達の行動に気づき、その姿に影響されて、順番を守るようになった。

この事例から、子どもは元来気なげで純粋である。そして学校が好き、友達と一緒にいるのが大好きである。こうした子どもたちが安全で安心した学校生活を送るために、教師は常日頃から児童生徒との人間関係を築き生徒指導体制を見直し、維持していくことが大切である。